

---

# 必要とされる私、必要とする私

serena

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

必要とされる私、必要とする私

### 【コード】

N9162G

### 【作者名】

serena

### 【あらすじ】

「彼に暴力に悩んでいる」あの時はそう信じていた。彼女の問題はそんなに簡単なものではないのに。

(前書き)

恋愛のジャンルに置かせて頂きましたが、この話は恋愛小説と言えるものではないかもしれません。

読む人によっては後味の悪さや不快感を覚えるかもしれません。

それを踏まえた上で興味を持っていただけなのなら、最後まで読んで頂ければ幸いです。

“彼”はあたしがいなくなったらどうなってしまっただろう。

ほんのささいなことで、不安や怒りに支配されてしまう様な人。

出逢ったばかりの頃はもう少ししっかりしている人だった気がする。

いや、あたしも、“彼”も、しっかりしているように“見せる”人だった。

プライドが高くて、多くの人に愛されて、故に孤独。

あたしも、“彼”も、

いつだって寂しくて、

探してた、

居場所を、

自分を見つけてくれる誰かを。

-  
-  
-  
-  
-

『千佳……ごめん……ごめんなさい。』

何件も残る留守電。

『……千佳、どこにいるの。』

あたしを呼ぶ、愛おしい人のか細い声。

『帰って来て……僕には千佳しかいないんだよ……』

帰らなきゃ。

“彼”が待ってる。

「ごめん一馬、やっぱりあたし帰る。」

一馬は驚いた表情であたしの顔を見ると、真っ白な包帯が巻かれた左腕へと視線を落とす。

「帰るってお前……そんな状態になってもまだあの男の面倒見ることよ。」

この包帯は一馬が巻いてくれた。

昨晚、友達と飲んでいて帰りが遅くなったあたしに“彼”が逆上し、やかんに入っていたお湯をあたしの腕にぶちまけた。

熱くて、痛くて、怖くて。

思わず家を飛び出したあたしは無意識に一馬に電話をしたようだ。

一馬は前の恋人。あたしが今の“彼”と出逢った事をきっかけに関係を終わらせた。

すっかりした優しい人で、人間関係を大切にする人。

一馬のそんなところに惹かれたはずなのに、一馬の特別になりたいあたしは、全ての人に平等に優しい一馬に物足りなさを感じるようになってしまった。

一馬はそれでもこうしてあたしに優しく接してくれる。

「あたしがいないと彼、何するか分かんないし。」

一馬は一瞬何か言おうとしたけれど、あたしの顔を見て口を噤んだ。

右手を軸に立とうとしたけれど肩に激痛が走りあたしの身体はバラ

ンスを崩す。

右肩は“彼”に突き飛ばされた時に柱に打ち付けた。

なかなか治らないし、もしかしたら骨に異常があるのかもしれない。大きく青黒く膨れ上がった二の腕はどこか“彼”に似ている気がする。

よろけたあたしを慌てて支えようと一馬はそのままあたしを優しく抱き寄せた。

「千佳、帰ってこいよ。このままじゃお前まで壊れちゃうよ。」

“彼”が頭のおかしい人だと言われた気がして、思わず声を荒げた。「あたしと彼はそっくりなの！あたしには彼しかいないし、彼にもあたししかいないの！」

体を包む腕を振り払おうと必死でもがくあたしを一馬は力を込めて抱きしめる。

「千佳っ！冷静になれよ！毎日のように怪我して、泣きながら俺に電話してきて、それでもお前幸せだって言えんのかよ！」

一馬は怒鳴らない人なんだと勝手に思っていたあたしは、ぶちまけようと思っていた言葉を全て飲み込んでしまった。

その代わりにいくつもの大粒の涙が溢れた。

「千佳が幸せなら何にも言わないよ。でも、好きな女が傷だらけで泣きついてきても何もしてやれない俺の気持ちも考えてくれよ。」

一馬の体が少し熱くなるのが分かった。

その日あたしは一馬の家に泊まった。

今日1日は“彼”の事を忘れようと思つて携帯の電源も切った。

それでもずっと“彼”の事ばかり考えていた。

あたしが“彼”の事ばかり考えているのが伝わったのか、一馬は必要以上にあたしに触れようとしなかった。

付き合っている時、あたしをいつも寂しくさせたこの優しさが、今はこんなに温かくて、あたしはなんてワガママな女なんだろうと思つた。

その夜、“彼”の夢を見た。

泣きながら手を伸ばす“彼”。

目の部分だけが油絵の具で塗りつぶしたかのように隠れている、青黒く。

彼の方に進もうとするけれどあたしの体はあたしの望んだ通りに動

いてくれない。

それでもゆっくり、ゆっくり、“彼”の方へと近づいているようだ。

『千佳』

ああ、あの人の声が聞こえてきた。

『どこにいるの』

子供の様な可愛い人。

『助けて』

あたしにしか頼れない人。

あたしはそつと手を伸ばす。

「大丈夫、ここにいるよ」

細くて白い“彼”の手をしっかりと掴む。

「ごめんね、帰ろう」

彼を導こうとあたしは力強く彼の手を引く。

ずるじ

手に伝わる気持ちの悪い感覚と重み。

彼の腕が肩の付根から引きちぎれて、あたしの握った手からだらりと下がっている。

「帰らなきゃ」

じつとりと湿ったサイズの大きいTシャツを脱ぎ、壁にかけられていたキャミソールに腕を通す。

電気のような痛みが走るけれど、“彼”の事を思つてこの痛みさえ愛おしく思える。

家に帰ると“彼”がいつものように泣きながら抱きしめてくれる。

『ごめんね』

独り言のように呟くと、子供を愛でるかのようにあたしの怪我に触れて、優しくキスをしてくれて、そしてこつこつ言つ。

『愛してる』

ブルーのデニムは夜の空気をよく吸っていて、履くと汗でほてった体を冷やしてくれた。

隣で寝る一馬を起こさないようにそつと部屋を出る。

もうこの部屋に来る事もないだろうな。

何度そう思ったか分からないけれど。

まだ電車も動いていないようだ。

この時間の街の空気は普段より透き通っている。

今この瞬間、起きているのは世界であたしだけなんじゃないだろうかなんて感覚に陥る。

皆が眠り静まる時。

車も、人も、動物も。

“彼”も、一馬も。

30分程歩くとあたし達の家が見えた。

夜に溶けそうな薄い青っぽい外観の小さなアパート。

階段を静かに登り、203号室のノブに手を掛ける。

・・・鍵？

普段家にいるときは鍵なんて掛けないのに。

デニムのポケットから鍵を出し扉に差し込む。

「裕也？寝てるの？」

返事がない。

「裕也」

-  
-  
-  
-

僕が千佳と出逢ったのは僕の家のある駅。

終電でほろ酔い気分で帰ってきた僕は改札の脇に踞る女性に気がついた。

酔っているのか、泣いているのか、背中を震わしている。

「大丈夫ですか？具合でも悪いのなら・・・」

声をかけてすぐに彼女が靴を履いていない事に気がつく。

「何かあったんですか？」

彼女はゆっくりり顔を上げる。

同じ年くらいだろうか、消えてしまいそうに白い、華奢な女性。

「助けて。」

僕は言葉が見つからず、とりあえず彼女の前にしゃがみ込んだ。

「逃げてきたの。」

「誰から?」

「彼。」

僕の思考の鈍らせていたアルコールが少しずつ抜けていく。

「お願い、助けて。」

今にも折れそうな彼女の細い腕が僕の方へ伸びる。

袖から覗く真っ白な肌に大きな痣が見えた。

そうか、彼女はきっと“彼”の暴力から逃げてきたんだ。

「助けてって、僕はどうしたら良いの?」

「連れてって。」

「どこに?」

「あなたの家。」

僕の家。

何者かも分からない女の子を自分の家に連れて行くのはどうなんだろう。

そうは思いつつも、このままにしておくわけにも行かないので僕の家に来て帰る事にした。

裸足のまま歩かせるのも嫌だったので駅前タクシーを捕まえた。

運転手は彼女の様子を見ると一瞬軽蔑した様な目で僕を見た。

僕にとって、きつと一生で一番息苦しいタクシー。

空に溶けそうな薄い青っぽい外観の小さなアパート。

階段を上った先、203号室。

「どうぞ、狭くて申し訳ないけど。」

玄関の前でぴたりと足を止めた彼女を招き入れる。

部屋の中に入ってもそのまま立ち尽くしている彼女を浴室に呼び、砂や血で汚れた足を洗ってあげた。

外では気付かなかったけれど彼女は腕も、足も、痣だらけだ。

「痛くない？」

彼女の顔を覗き込むと、彼女は初めて笑顔を見せた。

「ブラックで良い？牛乳もフレッシュも切らしてて、お砂糖ならあるけど。」

「大丈夫。」

テーブルに2つのカップを置くと、彼女は一つ小さな息をついて話した。

「あたしの彼、あたしがいないと生きていけない人なの。」

僕は小さく頷く。

「最初は些細な喧嘩だった。あたしが大学の男友達と仲良さそうに歩いてるところを彼が偶然見たらしくて、家に帰ると口論になった。」

カップに口をつけると、カップに付いた口紅を丁寧に親指で拭う。

「その友達とは何もないのに彼は何を言っても信じてくれなくて。」

彼女が口を閉じると妙な静けさが部屋を支配する。

夏が近いせいか、部屋は少し蒸し暑い。

「殴られたの。何度も、何度も。そんな彼の姿を見るのは初めてだったから、怖くて。友達の家へ逃げた。でもその晩留守電が彼のメッセージでいっぱいになってて。」

「どんな？」

「帰ってきて、とか、お前がいなきゃ生きていけないんだ、とか。」

彼女はそのまま話し続けた。

“彼”の暴力がどんなに酷いか、暴力の後の“彼”がどんなに優しいか。

彼女にとって“彼”の暴力は愛に感じるという事。

それでも今日は命の危険を感じて逃げてきたという事。

「あたしはきつとおかしいの。そういう性癖。だから彼とはある意味ベストパートナーなのかもしれない。」

彼をどんなに愛しているか、そんな事を気が済むまで話して、彼女は最後にこう言う。

「ねえ、あなた名前は？」

「裕也。」

「裕也。ねえ裕也、あたし今日は彼の事忘れたい。」

正気なのか分からないとろけた瞳で僕を誘う。

男の僕はまだ少し残るアルコールと少しじっとりとした部屋の空気のせいにして、真っ白な彼女に身を重ねた。

「君の名前は？」

「千佳。」

千佳はそれから僕の家に住みだした。

彼女は極度の寂しがりで、束縛される事を望んでいるようだった。

僕は束縛するのにもされるのにも嫌いだったから、自分のペースの生活を続けようとした。

ある日家に帰ると千佳の腕に大きな痣があった。

「ごめんなさい。」

その一言で僕は察知した。千佳は“彼”に会いに行ったんだと。

「どうして。」

「寂しかったの。」

「ごめん。」

「あたしが悪いの。」

「僕がもっと千佳の側にいてあげれば千佳を苦しめる事もなかったんだよね」

それから僕は千佳と一緒に過ごす時間が多くなった。

千佳は幸せそうだったし、千佳の白い肌から痣が消えていく事が嬉しかった。

外が本格的に熱くなってくると、千佳が“彼”に会いに行く事が増えた。

僕のバイトの時間でさえ千佳は一人でいる事に耐えられなくなったようだ。

千佳の真っ白な肌に、またいくつもの痣が出来た。

痣を見る度、僕は罪悪感に見舞われ千佳に謝る。

「1人にしてごめん。」

「僕と一緒にいるから、もう“彼”のところには行かないで。」

「どこにも行かないで。千佳がいないと不安でたまらない。」

思えば全て千佳の思惑通りだったのかもしれない。

僕がその違和感に気がついたのはいつだったろうか。

千佳の怪我の位置。

体の前側や上半身の左側、下半身は右側に多く、何度も繰返したり、怪我が集中している場所がある。

僕は千佳との生活に疲れを感じていた。

逃げ出したい、僕がここにいるから千佳は帰って来るんだ。

あの日、友達との飲み会があるから帰れるか分らないと、千佳に電話をした。

電話先の千佳は小さな声で「うん」と言うと電話を切った。

きっと千佳は彼の家に行く。

僕は久しぶりに自分の家で一人でゆっくりしたかった。

電話をして少しして僕は家へ向かう。

駅から家へ歩いていると途中、しゃがみ込んでいる女性の姿。

千佳？

思わず駆け寄ろうとする僕の目の前に別の男が駆け寄る。

「千佳！」

「一馬、ごめん。」

「お前、腕……」

男が千佳の腕を掴む。

千佳の左腕に広がる生々しい火傷。

「痛っ」

「これ、また彼氏が？」

千佳は何も言わない。

そのまま二人はタクシーに乗り込み、僕の前から姿を消した。

あの男は？ “彼”？

いや違う、千佳の腕にはもうすでに俺の知らない怪我があった。

いつの間に？

俺が電話してからの短時間に“彼”にあったのだろうか。

混乱する頭を抱えながら203号室の扉を開ける。

「暑っ」

夏の暑さ？それにしては異常ではないか？

何か。

キッチンで手を洗う。

「熱っ」

いつもどおりきちんと整頓されたキッチン。

やかんが熱を帯びている。

僕は急いで荷物をまとめた。

最低限のものだけで良い。後は業者に頼めば良いのだから。

僕はいそいでタクシーに乗り込み友達の家を駆け込んだ。

-  
-  
-  
-

部屋に裕也はいなかった。

いつもどおりのように見えるけれど、いつも同じ場所にあったパソコンや携帯の充電器、通帳、親から貰ったというマグカップ・・・裕也の大切なものが消えていた。

あたしはその場にしゃがみ込み、近くにあった鋏で大切に伸ばしていた髪をばっさりと切り落とした。

一馬に電話しなきゃ。

「あたしが彼を1人にして一馬の部屋に泊まったりするから、彼が怒ってあたしの髪を・・・」

-  
-  
-  
-  
-

新しい家へは友達が家具を運んでくれる事になった。

友達からの電話に僕は鳥肌が立つ。

「お前の部屋に大量の髪の毛あるんだけど」

-  
-  
-  
-  
-

千佳のいない生活は平和だけれどどこか寂しくもある。

きっと彼女も常に寂しかったんだろう。

彼女はいつだって“彼”を探してる。

“彼”と誰かを重ね合わせて、寂しさを埋めようと必死にもがいてる。

僕も彼女を殴ればよかったのかもしれない。

傷つけて、縛り付けて、たまに撫でてやれば、彼女はどこにも行かずに大人しく僕を待っていたのかもしれない。

そう、穏やかなときを過ごす今だから思う。

(後書き)

あたしは昔から嘘がないと生きていけない人間でした。

自分を守る為にいくつも嘘をついて、それが嘘か本当か自分自身分からなくなってしまったり、自分の嘘がどんどん一人走りして手に負えなくなってしまうたり、そんな経験があります。

あたしのなかの“彼”はとても優しい人でした。

実際存在しないはずなのに、何かがあれば助けてくれる“彼”の存在に支えられて生きてきた気がします。

あたしが成長するにつれ“彼”は2人になり、あたしのなかで存在感を増しているように感じました。

そんな“彼”が完全に消えたのは高校の卒業間近かな。

あたしが守らなきゃいけない大切な人が現れて、自然と“彼”は消滅しました。

今も嘘はつくけれども、人を幸せにする為の嘘が増え、嘘に飲み込まれる事がなくなりました。

最近では「人間は必要とするところから始まって、必要とされる事で強くなるのかな」なんて生意気な事を考えたりします。

なんだか意味もなく長々としてしまいましたが、最後まで目を通して頂きありがとうございます。

s  
e  
r  
e  
n  
a  
.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9162g/>

---

必要とされる私、必要とする私

2010年10月11日13時31分発行